補足：米国の大学院入試について

読者の中には米国への留学をお考えの方もいらっしゃるかも知れません．米国の大学院入試は世界各国誰でも受験できます．また，学部と大学院を別の大学で過ごす米国人もかなりいます．米国の大学（院）に入るには，勿論ある程度の英語力が要求され，TOEFL という試験でヒヤリング，単語力，長文読解が試されます．この試験は日本の主要都市で年数回実施され，何回でも受験でき，そのうちの最高点が記録されます．W大では約8割できれば無条件で，7割以上では入学後大学の語学コースの受講を条件に，英語力を認めてくれます．私立の有名校ではさらに基準点が高いでしょう．日本も留学ブームだそうですが，英語学習だけの留学とは異なり，英語を使って何か学問をしにゆくのはそう簡単なことではないのです．

意外と知られていないのは米国の大学院には共通試験があることです．これは GRE と呼ばれる多岐選択式で，各年数回実施されるものの受験は一回に限られています．日本では受験場も限られており，東京以外では主に米軍基地でしか受けられません（私は三沢基地で受験しました）．ですから GRE 受験自体が異国体験第一歩と言えるでしょう．午前中は一般知識の試験で，英語（これは TOEFL よりはるかに難しく，私など初見の単語が多く歯が立ちませんでした．理系の米国人学生でも苦労する人が多いそうです．）．数学（驚いたことに中学のレベルでした．）そして推理能力（パズルの本の問題だが，英語で書いてあるので意外に骨が折れました）が試されます．気象の大学院向けなら，この他に午後の専門から物理を選べば良いでしょう．物理は日本の大学院入試と同じレベルでしたが，山ほど設問があるので公式を暗記していなかった私は苦しめられました．

何やら日本の大学入試みたいですが，日本のように試験で全て決まるのではありません．意外と大事なのが3通の推薦状です．日本の気象のレベルは世界的なのでまず問題はありませんが，指導教官を含めその分野で名の知れた先達にお願いするのが一番です．また大学以降の内申書も送りますが，日本の大学の成績は米国では過小評価されるのが常ですから，これにはあまり期待できません．その代り，応募用紙（相手の大学から郵送してもらう）の欄に自分の希望する研究テーマを具体的に書くのは勿論のこと，過去に大学院や卒論などで行った研究など別紙にまとめて，自分のやる気や能力を少しでもアピールすることです．

米国の大学は9月から新年度なので必要書類はその年の冬までに送ります．試験の準備もありますから，前年の春か夏には動き出した方が良いでしょう．GRE, TOEFL の詳細は日本フルブライト協会などで教えてくれます．

日本からの留学の場合，英語力に余程自信がある方を除き，修士号取得後が無難です．最初のうちは，授業中，教授の英語についてゆけず，これが大きなハンディ・キャップになります．ただし，日本人は数学に強いのが有利です．従って，修士までに気象学の基礎を身につけ，英語の論文にも慣れておけば，言葉上の不利を充分補えると思います．

1992年度支部講演会の開催について

記

行事名：気候変動と地球環境に関するシンポジウム
テーマ：「いま，地球の大気と水は？」――その最新像を語る――（気象学的に見た地球環境とその変化）
主　催：日本気象学会九州支部，福岡市，福岡県
期　日：1992年8月6日（木）午後1時～4時
場　所：福岡市中央区天神 1-8-1　Tel. 092-711-4111
福岡市役所15階講堂（500席，参加無料）
講　師：田中正之（東北大），高橋劭（九州大），山中正行（佐賀地方気象台）
連絡先：日本気象学会九州支部事務局
〒810 福岡市中央区大濠 1-2-36
福岡管区気象台内　Tel. 092-725-3614